

海外レポート

追手門学院大学 スポーツ研究センター 所員
社会学部 講師 林 勇樹



○ はじめに

2022年は、ハンガリー・ブダペストで行われた世界選手権（6月）と、アメリカ・ハワイで行われたジュニアパンパシフィック選手権（8月）、ペルー・リマで行われた世界ジュニア選手権（8月）に、本学より派遣許可をいただき、日本水泳連盟の科学サポートスタッフとして帯同させていただきました。ここでは、なかなか知られることのない現地の様子や、サポートの苦悩についてお伝えしたいと思います。

○ 現地についたら

科学サポートスタッフとして現地入りしたら、まずすることは「場所取り」です（写真1）。場所取りは、たいへん熾烈です。さっきまで貼ってあった自国の場所を示すテープが数時間後にはなくなっていることもあります。近年の世界選手権では撮影のためのスペースが用意されることが増え、荒くれ者は少なくなりましたが、電源コードが勝手に抜かれていたり、椅子がなくなっていたり、ということはよく起こります。ちなみに、各国一畳分程度の場所だと言われているのですが、いくつかの国は複数箇所場所を取っていたり（写真2）しており、前述の熾烈さの片鱗を感じただければと思います。

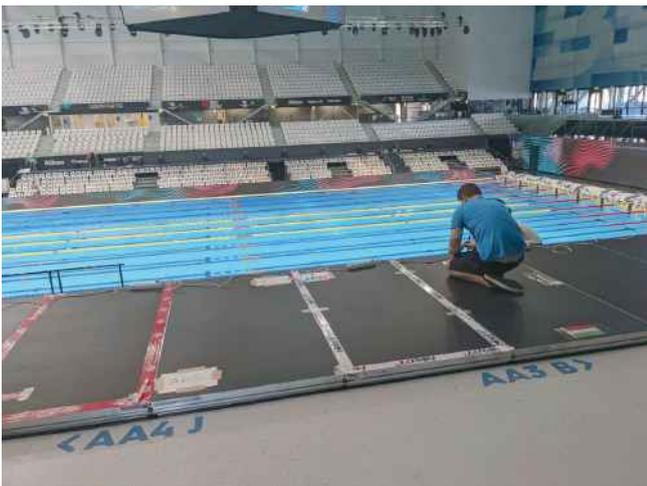


写真1 世界選手権での場所取りの様子



写真2 撮影・分析エリア設営後の様子（大会前日）

○ 競技会はとにかく賑やか

海外大会が国内大会と決定的に違うことは、スポーツ大会をエンターテインメントの1種として捉えているかどうか、に尽きます。競泳という試合は同じ場所をひたすら往復するだけの種目ですが、レース開始までに、これでもか、というほどに場内の演出を行います。選手入場時にはスポーツプレゼンテーション（写真3左）という、場内とアスリートとともに盛り上げるための取り組み（参加者全員、大会前日までに短い登場シーンの収録を済ませます）があり、写真や文字だけでない、視覚・聴覚に訴える形での大会運営は非常に刺激が大きいです。ちなみに、聴覚に対する刺激は笑えないほど大きく（写真3右）ノイズキャンセリングのヘッドホンをしていても、十分に大会観戦を楽しめる（？）ほどの音量です。



写真3 スポーツプレゼンテーションと環境音

○ いつも屋内ではない

アメリカ・ハワイで行われたジュニアパンパシフィック選手権大会は、環太平洋地域諸国（主要国はアメリカ・オーストラリア・日本・カナダ・ニュージーランド）が参加する大会で、屋外プールで開催されます。見た目は華やかですが、科学サポートの上では屋根がない、ということは悩みのタネになります。（悩むどころか実害があります。）まず面倒なのは「風」です。今大会は仮設スタンド上でのサポートだったため（写真4）、本当によく揺れました。日除けや雨除けのための傘を、根本から折ってしまうほどの暴風に見舞われることもあり、結束バンドで補強しながら乗り切りました。

さらに面倒なのは「雨」です。地理的な要因もあり、スコール（一時的な大雨）が降ります。雲が澱んできたら、あっという間に雨が振り始めます。準備日が雨だったおかげで、雨除けとしてお土産屋でビーチパラソルを購入していたので、それをスタンドにくくりつけてなんとかしのぎました（写真5）。海外遠征にはゴミ袋がとても役立つので、たくさん持っていったことも、機材や荷物を雨から守るのに一役買ってくれました。



写真4 屋外の仮設スタンドでのサポート



写真5 雨よけの傘と、大量のゴミ袋

○ 複合スタジアムとしてのスポーツ施設整備

ペルー・リマで行われた世界ジュニア選手権は、2019年にパンアメリカン競技大会（アメリカ地域の国際競技大会）を開催するために作られた新しい施設で行われました（写真6）。このような大会は、必ずしも先進国で実施せず、途上国がホスト開催することでスポーツ施設の整備などを支援・促進することにも繋がっているようです。このプールは地上1階に位置するのですが、写真6の天井の上のフロアには何があると思われるでしょうか。実は、プールの上は陸上競技場のトラックになっているのです（写真7）。



写真6 ペルー・リマのVIDENA Aquatic Center



写真7 施設の屋上は陸上競技場（トラック）に

○ おわりに

本学の学生にはスポーツ情報学やスポーツ情報戦略論といった講義の中で、科学サポートについての話もしていますが、本稿では少し視点を変えて、普段は知られることのない、施設のことや、サポートのための準備に関わる内容をまとめてみました。最後までお読みくださりありがとうございました。